

## 「慰めの共同体」

### コリントの信徒への手紙二 1章4～7節

聖学院大学 大学・人文学部チャプレン 柳田 洋夫

本日10月6日から10月27日まで、秋のキリスト教週間として、「創立記念講演会」や「キリスト教と諸学の会」が予定されています。また、「苦難を乗り越える」というテーマのもとで全学礼拝が持たれます。しかし、例年とは全く違う、オンラインでの礼拝と行事ということになりました。今さら申し上げるまでもなく、いわゆる「コロナ禍」によるものです。

私たちは突然、思いもよらない事態に、苦難の中に放り込まれました。そして、依然として厳しい状況に置かれています。また、コロナに限らず、私たちは、人生の歩みの途上で、様々な苦難もしくは苦悩に遭遇することを避けることはできません。このキリスト教週間の全学礼拝においては、そのような苦難というものをどう受け止めるか、また、苦難を乗り越える道があるとすれば、それはどのようなものかということ、聖書のみ言葉に聞きつつ、共に考えていきたいと思えます。

本日与えられているみ言葉は、伝道者パウロの手紙からのものです。パウロの生涯は、まさに内憂外患、外なる苦難と内なる苦悩の連続だったと言ってよいでしょう。しかし、数々の苦しみを味わう中で、パウロには大きな気づきが三つ与えられました。第一に、あらゆる苦難に際して神の慰めが与えられるということです。第二に、そのことによって、今度は自分が誰かを慰める者になることができるということ、そして、第三に、教会に連なる者たちは、苦しみも慰めも共にできるということです。しつこいくらい慰めという言葉が繰り返されているところに、その大きな恵みに気づいたパウロの喜びがにじみ出ているようにも思われます。

ちなみに、これは半分冗談として聞いていただければよいことですが、本日与えられているみ言葉には、「苦難」や「苦しみ」という言葉が七回、そして「慰め」という言葉が八回出てきます。図らずも、「七転び八起き」ならぬ「七苦難八慰め」となっているところに、私はひとり勝手に感動を覚えました。考えてみるに、悩み苦しみというものは、七回のみならず、何度も私たちに襲いかかってくるものでしょう。そこで私たちは、転ぶというか倒れるような思いを味わいもします。

しかし、「慰め」というものはそれ以上に与えられる何かであることを聖書は告げ知らせています。そのような苦難を超える慰めが確かにあるとすれば、私たちは何回転んでも倒れてもまた起き上がることができるはずで

これは、数だけの話ではありません。聖書における「慰め」という言葉は、「励まし」を意味するものでもあります。あえて英語で言うならば、encourage（エンカレッジ）、勇気づける、という意味合いにもなります。だから、単に傷をなめ合う、ということではないのです。さらに言えば、その言葉はもともと、「そばに呼ぶ、招く」という意味だそうです。確かに、慰めや励ましというものは、実際に誰かがそばに来て、または自分が誰かのそばに行き寄り添うことによってなされるものでしょう。そして、本日のみ言葉に基づいて言うならば、キリストにおいて神が私たちに寄り添ってエンカレッジしてくださる。だから、私たちがまたその神の愛に背中を押されて、誰かに慰めと励ましを与える者になることができる、ということになります。

パウロはそのことを、教会における交わりを通して知りました。教会とは、まことの救い主であり、慰め主であるキリストによって一つにされる「慰めの共同体」でもあります。それはまた、互いの存在そのものを希望としつつ、喜びのみならず、苦しみや悲しみをも共にしながら歩む者たちの群れです。もしそのような共同体が、教会のみならずこの社会において少しでも現実のものになるならば、苦難を共に受け止め、共に立ち向かい、乗り越える道が拓かれるのではないかと思います。そして、イエス・キリストのみ名によって建てられたこの聖学院大学こそ、学びの共同体であるとともに、ここまで見てきたような意味での「慰めの共同体」を目指すものでありたいと願うものであります。

2020年10月6日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「苦難を乗り越える」